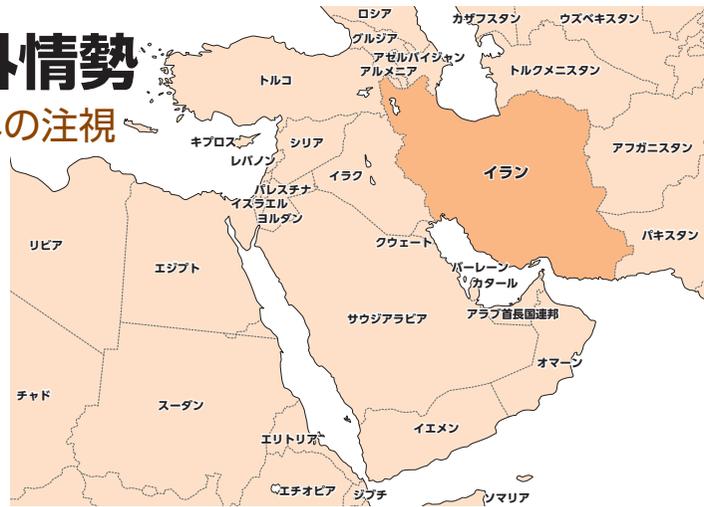


イランを巡る国内外情勢

—求められる地域の不安定性への注視

国際大学 特任教授

元 駐イラン大使 駒野 欽一



輝かしい歴史と文化からの国民性

中東、いや世界でも有数の歴史と文化を誇るイランについて、歴史・文化への理解なくしてその国民性を理解するわけにはいかない。

イラン人の心情には、これまでの輝かしい歴史と文化が今でも生きている。4つの歴史上の大きな出来事がある。それは①紀元前から紀元後に地域を支配した2つのペルシャ帝国、②世界を席卷したイスラム帝国、その支えとなった文化をアラブ人とともに担った事実、③16世紀、イスラム教シーア派を国教として世界の半分と自称する程の繁栄を享受したサファビー朝イラン、④10世紀から13世紀、さらにはモンゴル侵攻後の14世紀に花開いたペルシャ詩歌の伝統である。

西洋列強のイラン支配を巡る争いの中で、独立と近代化に腐心した現代イランがその基礎に求めたのは、いずれもかつての栄光の回復という側面を強く持つものであった。

アケメネス朝ペルシャとササン朝ペルシャという2つのペルシャ帝国は、域内のみならずヨーロッパ世界のギリシャ・ローマと覇権を争った。オリンピックのマラソンの起源として有名な「マラソンの戦い」はそうした争いの1コマといわれる。筆者がイランのシラーズで語学を勉強してい

た1971年、当時のパーレビ国王は隣の古都史跡ペルセポリスでペルシャ建国2500年祭を華々しく開催し、帝国の再建を誓った。

7世紀にアラビア半島に生まれたイスラム帝国は瞬間に地域・世界を席卷する。イランも例外ではない。屈服は屈辱ではあったが、受け入れる以外なく、むしろその後のイスラム文化をアラブ人とともに担うことでかえって自家薬籠中のものとすることができた。イスラムの法(シャリーア)を重んじるスンニ派と、指導者イマームを通して神とのつながりを重視するシーア派の対立は、イスラムにおけるイラン的要素の結果ともいえる。

シーア派の統治理論をベースに建国された現在のイラン・イスラム共和国の起源は、16世紀のサファビー朝イランに求められると言っても過言ではなからう。シーア派自体はイスラム教誕生の早い時期に発生し、9世紀にはイランが現在国教とする「12イマーム派」が誕生しているが、それがイランの正式な国教に採用されるのは、サファビー朝イランに至ってからである。

イスラム文化隆盛の後イラン文化圏で起きたことは、今日までイラン人の心を引き付けて離さない詩歌の興隆である。この時期詠われたフェルドウシーの『王書(シャーナーメ)』は今日のペルシャ語の基礎を打ち立てるとともに、イラン人の精神・